

〔論文〕

認知症高齢者に対するイメージと認知症についての知識 —短期大学女子学生と女性介護職員の比較—

Mental Images toward the Demented Elderly and Knowledge about the Demented Elderly; Comparison of Female Care Workers and Female Junior College Students

柴田 雄 企
Shibata Yuki

ABSTRACT

The purpose of this study are (1) to compare the mental images of the demented elderly held by female care workers and female college students, and (2) to examine the relationship between their images and their knowledge about the demented elderly. Nineteen pairs of adjectives were presented to 128 female subjects (84 college students and 44 care workers). The mean age of the college students was 18.5 years old, and the mean age of the care workers was 41.9 years old. The results showed that care workers have more accurate knowledge about demented elderly than junior college students. Moreover, the results also showed that the images of the demented elderly held by the care workers are significantly more positive than that of the junior college students.

キーワード

認知症高齢者イメージ、認知症についての知識、SD法、介護職員、短期大学生

Key Words: images of the demented elderly, knowledge about the demented elderly, semantic differential method, care worker, junior college student

問題と目的

高齢者イメージについての研究は、これまでに様々な年代の者を対象に数多くなされている。一方、認知症高齢者のイメージについての研究はあまりなされていない。高齢者人口の増加により、認知症高齢者数も増加傾向にある。国立社会保障・人口問題研究所の新しい将来人口推計をふまえた統計によると、2000年には160万人、2015年には262万人にまで増加すると予想されている（厚生統計協会，1999）。認知症高齢者は我々にとって、より身近な存在となってくると考えられる。このような社会状況の中で、人々は認知症高齢者に対してどのようなイメージを抱いているのだろうか。

認知症高齢者に対する認識については、これまでにいくつかの研究報告がみられる。柴田（2004）は短期大学人文系学科に在籍する学生を対象に、認知症高齢者イメージを検討した。その結果、短期大学女子学生の認知症高齢者イメージは中立よりやや否定的であった。また、認知症に対する知識によって、対象者を群分けし、比較すると、認知症につい

での知識を持っている者の方が持っていない者より認知症高齢者に対して、親しみを感じていることが示唆された。

また、介護職に就いている者を対象とした研究として、奥村ら（2003）によるものと松山ら（2004）によるものがあげられる。奥村ら（2003）は認知症介護に関わる専門職が抱く、高齢者および認知症高齢者のイメージについて調査し、イメージの違いに関与する要因について職種、同居経験の有無、祖父母とのかかわり度合などの点から検討している。その結果、看護職より介護職の方が高齢者、認知症高齢者の「積極性」因子について肯定的イメージを持っていたことなどを示している。松山ら（2004）は408人の介護者を対象に重度認知症高齢者に対する認識について検討している。そして、介護者は脳血管性認知症よりもアルツハイマー型認知症のほうを多くの側面において否定的に感じていることや、介護者は対人共感性に関係している項目（「笑顔ではたらきかけると笑顔が返ってくるように感じますか」、「はたらきかけると、あなたの気持ちが伝わっているように感じますか」など）について、重度認知症高齢者を肯定的に感じていると報告している。

また、看護短期大学生を対象とした研究もみられる。吉本ら（2004）は看護短期大学生の認知症高齢者に対するイメージを、学年（1年生から3年生）により比較したところ、1・2年生では認知症高齢者にマイナス・イメージを持っているが、3年生はプラス・イメージを持っていたという結果を得ている。この結果について、3年生は実習の中で、1人の認知症高齢者を受け持ち、行動を共にすることによって、尊厳を持つ1人の人として捉えることができるようになったためではないかと吉本ら（2004）は考察している。

古谷野（1993）は、人々の老人観は、その社会で老人がおかれている状況を反映すると同時にそれを規定し、さらに老人自身の自己概念や適応にも大きな影響を及ぼすと述べている。この指摘は認知症高齢者についても推測できることである。人々の認知症高齢者に対するイメージは認知症高齢者が置かれている社会状況を反映していると思われる。また、人々の認知症高齢者に対する接し方が、認知症高齢者の自己概念や生活の中での行動にも影響を及ぼすのではないかとと思われる。

これまで高齢者イメージについては、「専門職を含む、サービス提供者の高齢者観は、一般の人々と大差なく、全般に否定的で、重介護を要する高齢者にサービスを提供する機会の多い人ほど特に否定的だとされている」（古谷野，2003）との指摘がある。一方、認知症高齢者のイメージについての吉本ら（2004）の報告では看護学生の高学年の者の方が肯定的イメージを抱いており、高齢者イメージの場合とは異なっている可能性がある。そこで、本研究では、介護職員と短期大学生を対象に、認知症高齢者に対するイメージを捉え、サービス専門職の認知症高齢者観が否定的なものなのかどうかを検討することとした。また、認知症高齢者イメージを認知症高齢者についての知識との関連からも検討することとした。

方法

1. 対象者 A県内の短期大学人文系学科の女子学生とA県内の介護職員を対象とした。男子学生および男性介護職員は少数の回答しか得られなかったため、分析対象から除いた。有効回答数は短期大学女子学生が84名（平均年齢18.5歳）、女性介護職員が44名（平均年齢41.9歳）の合計128名であった。短期大学生にこれまでの高齢者介護の経験を尋ねたと

ころ、26名が何らかの経験があると回答していた。また、介護職員の平均勤務年数は7.7年(SD=5.2)であった。本研究の対象者は柴田(2005)における対象者と同じである。

2. 調査票の内容

(1) 認知症高齢者に対するイメージ

認知症高齢者イメージを捉えるためにSD法(Semantic Differential method)を用いた。SD法の形容詞対としては古谷野ら(1997)が用いたものと同じものを用いた。本研究の調査では、認知症高齢者について「あなたはどのような印象を持っていますか」という質問に対して5件法で回答を求めた。対象者のイメージ評定は、表2の形容詞対の左側の形容詞に「とてもあてはまる」を1、「ややあてはまる」を2、表2の形容詞対の右側の形容詞に「ややあてはまる」を4、「とてもあてはまる」を5とし、「どちらともいえない」を3として数値化した。

(2) 認知症についての知識

認知症についての一般的な知識を調べるため、「老人性痴呆(ぼけ)に関する青少年の意識調査報告書」(財団法人ぼけ予防協会, 2003)で用いられていた、認知症者への介護についての項目から抜粋し、使用した。なお、報告書で使用されている項目は聖マリアンナ医科大学認知症治療研究センター作成「正しい介護の豆知識」によるものである。本研究では20問を用い、1問1点の20点満点とした(表1参照)。得点が高いほど認知症についての一般的な知識を持っていると解釈される。問1～問6は2択問題で表1において下線のある方が正答である。問7～問9は記入式の問題である。問10～問20は○×クイズ形式の問題である。

3. 調査手続き

短期大学生については2004年6月、短期大学における授業開始前に学生に調査の目的を説明し、調査票を配布し記入を求めた。協力が得られ、回答のあった調査票をその場で回収した。介護職員のうち27名は介護研修(2004年3月)の際、調査票を配布し、回答返信を依頼し、後日、郵送のあった者である。その他の17名の介護職員については職場で調査票を配布し(2005年2月)、後日、回収した。

結果

1. 認知症についての知識—女性介護職員と短期大学女子学生の比較—

認知症についての知識テストの結果について、介護職員と短期大学生の間に違いがないか検討するため、t検定を行った。その結果、20問中12問で両群間に有意差がみられた(表1)。なお、1問1点なので、各問いにおける平均値の100倍がそれぞれの正答率を表すことになる。また、認知症高齢者についての知識テストの合計得点は、介護職員の平均値が15.86(SD=1.50)で、短期大学生の平均値が12.20(SD=2.10)であり、両群間に有意差がみとめられた($t=-11.36$, $df=114$, $p<.001$)。

表1 認知症についての知識テストの各設問の平均値と2群比較 (t検定) の結果

	介護職員 の平均値	t 値	短期大学生 の平均値
問1. 認知症の初期は物忘れを自覚 (<u>している</u> ・していない)	0.55	-1.52	0.40
問2. 抗認知症薬を投与すると認知症は (<u>治る</u> ・治らない)	0.80	0.53	0.83
問3. (アルツハイマー病・ <u>脳血管性障害</u>) の原因は脳梗塞である	0.93	-3.14**	0.74
問4. 認知症はまず (<u>古い</u> ・新しい) 出来事から忘れる	1.00	-1.75	0.96
問5. 認知症には物忘れなどの (中核症状・周辺症状) と、感情障害や問題行動などの (中核症状・周辺症状) がある	0.55	-2.86**	0.29
問6. アルツハイマー病の発症頻度は1:3で (<u>女性</u> ・男性) に多い	0.93	-3.14**	0.74
問7. アルツハイマー病の死亡原因の第一位は () である (肺炎)	0.09	-1.74	0.01
問8. アルツハイマー病は、脳の全体にわたって () が死んでいくものである (脳神経細胞)	0.70	-0.43	0.67
問9. 認知症のケアには、身体面のケアと () のケアがある (心理面、精神面)	0.93	-1.37	0.86
問10. 認知症症状がより強く現れるのは、より身近な者に対してである (○)	0.70	0.55	0.75
問11. アルツハイマー病の発病から末期までは平均すると5年間である (×)	0.68	-1.50	0.55
問12. うつ病でも、認知症に似た症状を示す事がある。(○)	0.95	-5.58***	0.61
問13. 計算が苦手になってくるので、訓練した方がよい。(×)	0.66	-4.33***	0.29
問14. 現実にはありえないようなことを話したら、訂正した方がよい。(×)	1.00	-9.11***	0.50
問15. 新しい場所へ外出するなど毎日違う刺激を与えた方がよい。(×)	0.86	-8.68***	0.25
問16. 自発的に覚えるように、カレンダーや時計は本人の目の届かない所に置く方がよい。(×)	0.98	-2.69**	0.86
問17. 生活の中で大切なことは張り紙で表示するとよい。(○)	0.98	-2.07*	0.89
問18. 慢性アルコール中毒も認知症につながることもある。(○)	0.93	-5.75***	0.55
問19. 知的障害や急性の意識の障害などで起きている認知障害も認知症の一つである。(×)	0.82	-3.81***	0.51
問20. アルツハイマー病といっても、人によって症状が違う。(○)	0.82	2.12*	0.95
合 計	15.86	-11.36***	12.20

*p<.05, ** p<.01, *** p<.001

2. 女性介護職員と短期大学女子学生の認知症高齢者イメージの比較

介護職員と短期大学生の認知症高齢者イメージを比較するため、それぞれの形容詞対について、t検定を行なった。その結果を表2にまとめた。介護職員も短期大学生も認知症高齢者に対して「どちらともいえない」よりやや否定的なイメージを抱いていた。両群の認知症高齢者イメージを比較して、有意差の見られた形容詞対は「暗い－明るい」「嫌いな－好きな」「劣った－優れた」「下品な－上品な」「弱い－強い」「無愛想な－愛想のよい」「冷たい－暖かい」「鈍感な－敏感な」であった。このうち、「冷たい－暖かい」は両群とも「どちらともいえない」の3より大きい値（肯定的）であったが、介護職員の方がより肯定的（「暖かい」）に評定していた。「劣った－優れた」「下品な－上品な」では両群ともに「どちらともいえない」の3より小さい値であったが、短期大学生の方がより否定的（「劣った」「下品な」）に評定していた。「暗い－明るい」「嫌いな－好きな」「弱い－強い」「無愛想な－愛想のよい」「鈍感な－敏感な」の形容詞対では介護職員が認知症高齢者に対して肯定的なイメージを抱いている一方で、短期大学生は否定的なイメージを持っていた。

表2 介護職員と短期大学生の認知症高齢者イメージ評定値（標準偏差）とt検定の結果

形容詞対	介護職員 (N=44)	t 値	短期大学生 (N=84)
受動的な－能動的な	2.95 (1.01)	-1.86	2.58 (1.10)
暗い－明るい	3.25 (0.81)	-2.13*	2.90 (0.92)
頑固な－柔軟な	2.34 (0.99)	- .18	2.31 (0.93)
嫌いな－好きな	3.57 (0.90)	-6.29**	2.57 (0.83)
消極的－積極的	2.89 (1.04)	.51	2.98 (0.89)
劣った－優れた	2.64 (0.81)	-2.77**	2.24 (0.75)
遅い－速い	2.55 (0.98)	-1.74	2.25 (0.88)
枯れた－みずみずしい	2.45 (0.79)	- .68	2.35 (0.90)
きびしい－やさしい	3.00 (0.86)	.08	3.01 (0.80)
下品な－上品な	2.89 (0.54)	-3.25**	2.52 (0.70)
弱い－強い	3.07 (1.15)	-3.59**	2.37 (0.82)
無愛想な－愛想のよい	3.30 (0.95)	-2.71**	2.85 (0.86)
地味な－派手な	2.77 (0.60)	- .57	2.70 (0.69)
冷たい－暖かい	3.52 (0.73)	-3.68**	3.01 (0.75)
鈍感な－敏感な	3.16 (1.08)	-2.36**	2.69 (1.06)
落ち着きのない－落ち着きのある	2.02 (0.90)	1.39	2.26 (0.93)
騒がしい－静かな	2.84 (0.91)	- 1.47	2.57 (1.02)
さびしい－にぎやか	2.84 (1.06)	- .92	2.68 (0.88)
不活発な－活発な	3.05 (1.08)	- .24	3.00 (0.96)

* p<.05, ** p<.01

3. 認知症についての知識と認知症高齢者イメージとの関連

認知症についての知識と認知症高齢者イメージとの関連を検討するため、認知症についての知識テストの合計得点と認知症高齢者イメージの評定値とのピアソンの相関係数を求めた(表3)。女性介護職員においては、認知症についての知識の合計得点と有意な相関がみられた形容詞対は「受動的な-能動的な」($r=.32, p<.05$)、「暗い-明るい」($r=.35, p<.05$)、「冷たい-暖かい」($r=.30, p<.05$)の3つであった。短期大学生については、認知症についての知識の合計得点と有意な相関がみられた形容詞対は「上品な-下品な」($r=-.28, p<.05$)、「騒がしい-静かな」($r=-.30, p<.01$)の2つであった。

表3 認知症高齢者イメージ評定値と認知症についての知識得点の相関係数

形容詞対	介護職員 (N=44)	短期大学生 (N=84)
受動的な-能動的な	.32*	.14
暗い-明るい	.35*	.21
頑固な-柔軟な	.16	-.17
嫌いな-好きな	-.01	-.05
消極的-積極的	.18	.16
劣った-優れた	.21	-.05
遅い-速い	.10	.16
枯れた-みずみずしい	-.20	.08
きびしい-やさしい	.27	.14
下品な-上品な	.24	-.28*
弱い-強い	.01	.19
無愛想な-愛想のよい	.24	-.11
地味な-派手な	.12	.18
冷たい-暖かい	.30*	.01
鈍感な-敏感な	.29	-.00
落ち着きのない-落ち着きのある	-.20	-.20
騒がしい-静かな	-.10	-.30**
さびしい-にぎやか	.10	.15
不活発な-活発な	.21	.18

* $p<.05$, ** $p<.01$

考察

1. 認知症についての知識 - 女性介護職員と短期大学女子学生の比較 -

結果より、認知症についての知識テストの得点を介護職員と短期大学生との間で比較したところ、20問中12問において有意差がみられた。有意差のみられた12問中11問において、介護職員の方が短期大学生より正答率が高かったことから、介護職員の方が認知症高

齢者について正確な知識を持っていると言えるだろう。なお、本研究の対象者と同じ対象者を分析した、柴田（2005）では高齢者の知識においては両群間で有意差はみられなかった。よって、介護職員と短期大学生では高齢者についての知識においては差がないが、認知症についての知識には違いがあると言えよう。特に、認知症高齢者の介護に関するとされる知識について群間の違いが大きかった（現実にはありえないようなことを話したら、訂正した方がよい、新しい場所へ外出するなど毎日違う刺激を与えた方がよい）。これは介護職員が日頃、認知症高齢者の介護に関わっているためであろう。

2. 認知症高齢者イメージ - 女性介護職員と短期大学女子学生の比較 -

介護職員と短期大学生の間で有意差のみられた形容詞対は8つあった。本研究と同じ対象者の高齢者イメージを比較した、柴田（2005）では介護職員と短期大学生の間で有意差のみられた形容詞対は5つであった。このことから、両群間の高齢者イメージの違いより、認知症高齢者イメージの違いの方が大きいことがうかがえる。この理由として、介護職員の接する利用者の多くが認知症高齢者であるかもしれないということが挙げられる。介護職員が日頃、接しているのは高齢者施設に入所、あるいは通所している高齢者である。施設入所高齢者の9割近く、そして、在宅介護を受けている高齢者の約2割が認知症であるとの報告がある（生活情報センター編集部，2004）ことから、介護職員が日頃、接しているのは認知症高齢者が多いと推測される。このため、介護職員の方が短期大学生より、認知症高齢者についてよりよく知っており、そのことが認知症高齢者に対するイメージに影響したのかもしれない。

認知症高齢者イメージについての本研究の結果では、短期大学生より介護職員の方が肯定的であった。介護職員は認知症高齢者を「好きな」「暖かい」対象として捉えていることがうかがえた。これまで、高齢者イメージについては、専門職はどちらかと言えば否定的にとらえられてきた。これには介護職員に高齢者イメージの評定を求めると、高齢者のイメージというより、日頃、自分が接している認知症高齢者のことが念頭に浮かび、一般の人々より否定的な結果となるということも影響していたのかもしれない。

3. 認知症についての知識と認知症高齢者イメージとの関連

短期大学生を対象とした柴田（2004）では、認知症知識高群の方が、認知症知識低群より、認知症高齢者に対して「心の広い」「社交的な」「親切的な」「人の良い」「感じの良い」イメージを持っていた。

認知症についての知識と認知症高齢者イメージとの関連としては、本研究では介護職員においては、認知症についての知識得点が高いほど、認知症高齢者を「能動的な」「明るい」「暖かい」と捉えていることがうかがえる結果であった。また、短期大学生では、認知症についての知識得点が高い者の方が、認知症高齢者に対して「下品な」「落ち着きの無い」イメージを抱えていることが示された。柴田（2004）では林（1978）による特性形容詞尺度を用いたが、本研究では古谷野（1997）で用いられた形容詞対を用いた。そのため、2つの研究結果を単純に比較することはできないが、短期大学生については矛盾する結果となった。

本研究の結果から、認知症についての知識と認知症高齢者イメージにはそれほど強い関連はないのかもしれないと考えられる。しかし、認知症についての知識と認知症高齢者イメージとは無関係であるとは言えない。介護職員と短期大学生とでは、認知症についての知識得点に有意差があり、両群の認知症高齢者イメージの違いには、認知症についての知識の違いも影響しているかもしれない。本研究の結果からは、この両群の認知症高齢者イメージの違いが、認知症についての知識によるものと特定することはできない。年齢、日頃の認知症高齢者との接触の程度、あるいはその他の要因が影響している可能性がある。今後、これらの要因の認知症高齢者イメージへの影響を検討することができるよう、介護に携わっていない中年期成人や、大学生と同年齢の介護職員なども対象に含めて検討していきたい。

謝辞 本研究の調査にご協力いただきました皆様に深謝いたします。

引用文献

- 林 文俊 1978 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 25, 233-247
- 厚生統計協会 1999 国民衛生の動向 厚生統計協会
- 古谷野亘 1993 老いに対する態度 (柴田 博・芳賀 博・長田久雄ほか編) 老年学入門: 学際的アプローチ, 177-184, 川島書店
- 古谷野亘・児玉好信・安東孝敏ほか 1997 中高年の老人イメージ—SD法による測定— 老年社会科学, 18 (2), 147-152
- 古谷野亘 2003 高齢期をみる目 (古谷野亘・安藤孝敏編著) 新社会老年学 シニアライフのゆくえ, 23, ワールドプランニング
- 松山郁夫・小車淑子 2004 会話ができない重度痴呆性高齢者に対する介護者の認識 老年社会科学, 26 (1), 78-84
- 奥村由美子・谷向 知・久世淳子 2003 痴呆介護にかかわる専門職がいただくイメージの違いに関与する要因について—高齢者と痴呆性高齢者へのイメージの違いを中心に— 老年社会科学, 25 (2), 233
- 生活情報センター編集部 2004 老後の生活設計を読み解くデータ総覧 2004, p23, 生活情報センター
- 柴田雄企 2004 短期大学女子学生の痴呆性高齢者イメージと高齢者イメージ 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 42, 59-66
- 柴田雄企 2005 高齢者に対する知識とイメージ—女性介護職員と短期大学女子学生の比較— 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 43, 57-64
- 吉本知恵・横川絹恵 2004 看護学生の痴呆性高齢者に対するイメージと看護観および影響因子—3年制看護短大生の学習進度による比較— 日本看護学教育学会誌, 14 (1), 35-45
- 財団法人ほけ予防協会 2003 老人性痴呆 (ほけ) に関する青少年の意識調査報告書